「平等」の夢と陥穽

中島岳志『下中彌三郎―アジア主義から世界連邦運動へ』（平凡社）を読む

花田史彦

一　はじめに

本稿では、中島岳志『下中彌三郎―アジア主義から世界連邦運動へ』（平凡社、二〇一五年。以下、本書）の書評を行なう。

本書は、政治思想史研究者である著者・中島の手による、平凡社の創業者・下中彌三郎（一八七八―一九六一）の評伝である。平凡社創業一〇〇周年を記念して刊行された。

近年、出版史の領域における成果が立て続けに発表されている(一)。中島も、本書に先駆ける形で岩波書店の創業者・岩波茂雄（一八八一―一九四六）の評伝『岩波茂雄―リベラル・ナショナリストの肖像』（岩波書店、二〇一三年）を上梓している。

さて、本書は単なる一出版社の経営者の生涯を整理したものではない。なぜなら、下中彌三郎という人物は、戦前から戦後を貫いて近代日本が孕むこととなった問題を体現しており、そうした観点から本書は書かれているからである。その構成は以下のとおりである。

はじめに
第一章　若き日
第二章　革新の時代
第三章　皇国日本による世界統一
第四章　世界連邦・非武装中立・平和憲法
おわりに
あとがき
下中彌三郎年譜
引用・参考文献

一瞥して分かるとおり、本書は下中彌三郎の生涯から、それに刻印された近代日本の歩みを追うことを試みている。

それでは、なぜ下中なのだろうか。まずは著者・中島の問題意識を「はじめに」から確認しておこう。

まず中島は、「下中の像は、一定しない」（五頁）としたうえで、そのような下中像を抱いていた代表的人物として大宅壮一を引き合いに出す。そして大宅がかつて下中のことを「右翼」「エタイの知れぬ怪物」と述べた文章を引用し、そうした捉え方の限界を主張する（五―六頁）。

では中島は、下中をどのように料理しようというのだろうか。彼は次のように述べる。

> 私が描きたいのは、多くの人たちが捉え損なってきた下中の一貫性である。彼を右派／左派という枠組みで捉えようとすると、必ず彼はそこから零れ落ちてしまう。結果、「無理論」で「ゴッチャ」な人物という評価が与えられてしまう。（七頁）（二）

要するに中島は、戦中に「転向」したと認識されてきた下中を、「右派」から「左派」へ、という枠組ではなく、「一貫性」において捉えようというわけである。果たしてその試みが成功しているのか、またそもそも「一貫性」という枠組がどの程度妥当であるのか、本稿では、最後にそうした問題も検討するが、まずは本書の内容

を紹介していきたい。

二　「若き日」について

本節では、第一章「若き日」の内容を紹介する。ここでは、下中の誕生から明治の終わりまでの歩みが書かれている。

下中彌三郎は、一八七八年、窯業が盛んな土地・兵庫県立杭に、自宅で寺子屋を開いていた父・久喜蔵の子として生まれた。

この土地・家に生まれたことは、下中にとって大きな意味をもった。自宅が寺子屋であったことは、のちに彼の平等主義的な教育論へと結実することとなり、また下中が長じて彼の地の陶芸家組合のリーダーを務めたことは、政治的な活動家としての起点となった。

ところで、下中には立杭の地で生涯を終える気はなかった。一八九九年、正教員試験に合格し、西宮小学校に赴任する。彼は、多分に啓蒙主義的な性格を具えており、立杭のような「田舎社会の改良」、さらにはそこから敷衍された「国語改良」への志向をもっていた（二八―三一頁）。

このような下中の考え方から、彼は「教員はネイション・ビルディングの重要な役割を担」うものであると考え、さらには「統一への欲望」を抱いていたという解釈を中島は示している（三四頁）。また下中は、「子ども」を純真無垢な存在として理想化しており、彼の教育論にはそうした童心主義も内在していた。

日本を教育によって「改良」し、「平等」な社会へと導いていくという志向が下中にはあり、それにシンボリックな根拠を与えたものが天皇であった。下中は、平等主義者であると同時に天皇主義者であった。なぜなら、彼は「明治天皇によって封建制が打破され、身分社会が解体されたと考えた」（四三頁）からである。

天皇を中心とした平等主義こそが、下中をして、社会主義、超国家主義、アジア主義、ひいては戦後の世界連邦論といった、一見すると雑多な思想へとシンパサイ

ズせしめたと中島は見て取る。また、こうした、ある意味でナイーヴな天皇主義＝平等主義は、日本による植民地支配の肯定にもつながった（八四―八七頁）。

このようにして、下中はその思想的基盤を形成してゆく。そんな彼が、教師の次に選んだ仕事こそが出版であった。

三　「革新の時代」について

本節では、第二章「革新の時代」の内容を紹介する。ここでは、下中が本格的に出版業へと乗り出していく戦前の動きが書かれている。

一九一四年、下中は成蹊社という出版社から、『ポケット顧問　や、此は便利だ』という用語集を刊行した。彼は、「ポケットサイズの用語集を出版することで、言葉の正しい使い方を提示すると同時に、教育を満足に受けていない庶民が新聞・雑誌にアクセスできるようにしたいと考えた」（一〇三頁）のである。

そして同年、下中は平凡社を創業する。さらには「大正デモクラシー」という時代のなか、当時流行していた革新運動団体とも積極的にコミットするようになっていった。ただし、彼はやはり当時流行していた普選運動には関心を示さなかった。アナーキーな性格をもつ下中の目には、議会政治とは特権階級の利益を担保するものにしか映らなかったからである。したがって彼の展開した活動は、出版や教育、たとえば池袋児童の村小学校といった、より幅広い人々に訴えかけることができると思われたものに傾斜した。

こうした一連の動きは、ひとえに彼の平等主義による。そして、繰り返しになるが、その象徴には天皇という存在が不可欠なのである。

ただし、下中が天皇主義者であることは、現実の日本国家を肯定することを意味しない。むしろ下中は一九二〇年代にアジア連帯論を掲げ、日本政府の対外政策批判を行なうのである。彼の平等主義は、アジアレベルに拡張されていったというわけだ。

また一九二五年を境に、平凡社の出版活動は活発化していく。当時の円本ブームの流れに乗って、平凡社もさまざまな全集の出版に注力した。文学、美術、思想といった、広い意味での「知」に「大衆」がアクセスできるようにしていくことこそが、下中の目的であった。

それでは、こうした下中の平等主義は、一九三〇年代以降の戦時体制において、いかなる形をとることになるのだろうか。

四　「皇国日本による世界統一」について

本節では、第三章「皇国日本による世界統一」の内容を紹介する。

下中が「大正デモクラシー」の時期において、議会政治に対して無関心であったことはすでに紹介した。しかし、一九二〇年代末から、彼は革新勢力の政党化を目指すようになる。具体的には愛国勤労党を設立し、天皇主義＝平等主義のあらわれとしての「一君万民」秩序の実現を構想するのである。

ここから、下中は「国家社会主義」への傾斜を深めていく。すなわち、「平等社会実現を目指す方法論を「自治」から「統制」へとスライドさせ」（二〇六頁）ていくわけである。

さらに、下中は一九三〇年代において、よりラディカルな方向へと舵を切り、草の根的な学校づくりでもなければ、政党運動でもない、国家の「純粋支配」（二二九頁）を希求していく。「それは「支配でありながら支配でないほど、各人の理想が調和され統一されてゐ」る状態であり、「搾取なき支配、搾取を含まない統制」が貫徹された体制」（二三〇頁）であるという。換言すれば、天皇親政であり、またその体制において、人々はすべて天皇の赤子ということになるという考え方である。このとき下中において、議会政治や自治、個人といったものは否定される。

また下中は、軍拡の必要性を説くようになり、「皇国日本」によるアジアの、ひいては世界の統一を志向して

いく。中島はこの時期の下中の構想を次のように説明している。

下中の国家主義は「日本による世界の統一」というヴィジョンへと拡張する。国家主義が国家を超えて世界を統一する構想へと連続する。ここに真の「超国家主義」が誕生する。／超国家主義は、極端な国家主義（ウルトラ・ナショナル）によって国家を超えた統合（トランス・ナショナル）をなし遂げようとするイデオロギーである。世界はいずれ一つに結合する。アジア主義はその中間段階に過ぎない。（二四四頁）

下中の思想は、天皇の下に世界は統一され、天皇の下での全人類の平等が実現されるという、いわば「八紘一宇」的なものへと収斂していった。そして、彼はその具体的な担い手として、軍人に期待をかけた。さらには満洲事変・国連脱退の賞賛や、天皇機関説の排撃といった言動も見せるようになっていった。

また、下中は一九四一年の「大東亜戦争」の勃発とともに、日本がアジア解放の歴史的使命を負っていることを強調するようになっていく。この戦争の先にある秩序を下中は「アジアが自主的に皇国日本に随順するあり方」（二七九頁）とし、欧米列強の植民地支配との差異を強調する。しかし、言うまでもなくそのような現実はあり得ず、日本は敗戦を迎えることとなる。

それでは、下中は戦後いかなる活動を展開していったのだろうか。また、そこにはどのような「一貫性」を見ることができるのだろうか。

五　「世界連邦・非武装中立・平和憲法」について

本節では、第四章「世界連邦・非武装中立・平和憲法」の内容を紹介する。

下中は、戦後もそのアジア主義を継続させていたと中島は見る。たとえば一九五二年には世界連邦アジア会議を開催し、「全人類はきょうだいであり、世界は一

つであります」（三〇一頁）と述べたという。これは欧米主導の国連批判でもあり、また米ソ冷戦体制批判でもあった。

このような下中のアジア主義を、中島は「軍事力抜きの大東亜共栄圏」（三一三頁）であるとし、その戦前以来の連続性を強調している。そして、以下のように下中の「一貫性」を論じる。

下中の思想の枠組みは、若き日から一貫していたと言えるだろう。それは変転する時代の中で「子供至上論」となり、「教育ユートピア」となり、「農村自治」となり、「八紘一宇」となり、「世界連邦」となって現れた。世界を右派／左派という二分法で分類するならば、彼の思想は極端にぶれているように見える。／確かに下中の発言には落ち着きがない。その性急な性格は、常に新しいものに飛びつき、持続性を欠いている。しかし、人類が究極のクライマックスに到達し、一つの生命体に回帰するというモチーフは、一貫して揺らいでいない。彼の希求する世界は、表層的な差異を超えて、一つに還元される。すべての人類が合一化し、神のまにまに生きる世界。格差のない社会。透明な共同体――（三一七頁）

しかし、このような、ある意味で高邁な思想をもつがゆえに、下中は、とりわけ政治活動において常に挫折を余儀なくされ、しばしば「独善的な正義に溺れ」（三一七頁）たようである。

戦後も下中は、老齢ながら出版にとどまらない活動を熱心に展開した。一九五五年の妻・みどりの死去以降、積極的に海外渡航を行なうようになる。

岸信介やネルーと交流し、アジア外交の重要性をあらためて確信した下中は、世界宗教会議の主宰、中華人民共和国の訪問（このとき下中は、資本主義でも共産主義でもない有機的な「協同主義」を実現した「楽園」として中国を評価していた）、台湾独立論の提唱などを行なう。また一九五七年には岸信介の外遊にも同行し、ア

ジアの連帯に奔走した。

しかし、現実は下中の思うようには動かない。彼が期待を寄せた岸信介は日米安保改定を行ない、対米従属を深め、また中国によるチベット弾圧の事実も明るみとなった。彼が夢見る世界連邦の実現には、ほど遠い現実世界が厳然として存在していたのである。

こうした混沌とした戦後世界批判として、下中の「一貫性」が再びあらわれてくると中島は見る。戦後も下中は「世界は皆兄弟という四海同胞の精神」（三五一頁）を掲げていたからである。そして中島は、以下のように下中の戦後思想を総括する。

下中は日本民族の純血性にこだわらない。むしろ世界のあらゆる民族と混血を繰り返し、一つの「人類」という民族共同体ができることを理想としている。下中の見解では、「日本人は建国のいにしえから混血民族」であり、その混血性が肉体的・精神的な強さにつながっている。日本人の雑種性を生かし、積極的に海外に移住して混血を進めることが日本人に与えられた使命である。このプロセスによって日本精神は自然と拡張し、「神ながら信仰」に基づく「八紘一宇」が確立する。全人類に一切の隔たりがなくなる。世界が一つに溶け込む。／下中は平和憲法を「神ながら信仰」の具現と見なし、世界連邦を「八紘一宇」の理想と見なすことで、日本精神による人類社会統合を構想した。（三五二頁）

「雑種」という意味での「日本化」が世界全体になされることが、すなわち八紘一宇であり、世界連邦であり、ひいては人類すべての平等の実現であった。これが、下中の晩年における到達点であった。そうした夢を残して、下中は一九六一年にこの世を去った。

六　「おわりに」について

本節では、「おわりに」の内容を紹介する。

ここでは、あらためて中島による下中の「一貫性」が確認される。中島は下中の生涯を貫いていた思想を次のようにまとめている。

それは人類統一への欲望であり、純粋で神秘的な世界の実現だった。ユートピア的楽土の追求は、生涯を通じて継続している。世界がクライマックスに到達し、人類が苦悩から解放されることを確信している。（三五七頁）

こうした思考において、下中は生涯をとおして一貫していたと中島は述べる。そして最後に、中島は下中の生涯を追うことによって得られた知見を、作家のG・K・チェスタトンの「平凡なことのほうが非凡なことよりもよほどに非凡である」という言葉を引用したうえで、次のように述べる。

下中が生涯理解できなかったのは、「平凡の非凡」ということだったのだろう。／人間が不完全である以上、世界は完成しない。ユートピアが実現することなどありえない。世界は連日、想定外の出来事に直面し、右往左往する。人々は、日々の変化の中で永遠の微調整を続ける。クライマックスなど永遠にやってこない。／大切なのは、「平凡」な日常を支えるバランス感覚であり、長い年月の中で積み重ねられてきた社会的経験値の継承である。不安定な世界の中で、「平凡」を維持することことが、人類の英知である。（三六一頁）

最後に中島は、下中をいわば「反面教師」とするかたちで、「保守」の重要性を説き、本書は閉じられている。下中の思想と行動のように、性急にユートピアを求めるのではなく、漸進的な改良の営為を積み重ねていくことこそが「保守」の真髄であるというわけであろう。そうした中島の政治的立場の是非についてはここでは措き、総評へと移りたい。

七　総評

まず本書は、出版人であり教育者であり政治活動家でもあった下中彌三郎という捉えがたい人物の生涯の総括をとおし、近代日本の歴史を描こうと試みた挑戦的な作品と言えるだろう。

メディア史、思想史、教育史といった多様な領域にまたがって登場する下中という人物を捉えるためには、評伝という歴史叙述の形式は妥当であったであろうし、またその形式をとることで、細分化されがちな歴史研究を「個」の射程から総合的に捉えられる可能性も見えてくるであろう。成田龍一がテッサ・モーリス＝スズキの言葉を引用しながら述べているように、「そもそも、歴史家にとって「個人は多くの知識の流れや多くのアイデンティティの側面が交差する点である」という認識がある（テッサ・モーリス＝スズキ『日本を再発明する』以文社、二〇一四年）」からである(三)。

また、映画評論家の思想を研究している評者の立場からすれば、昨今のメディア史研究者と思想史研究者とのあいだで交わされた、それぞれの領域の重なり合う部分と異なる部分とは一体何か、といった議論(四)にも一石を投じ得る実践であったようにも思われる。

そうしたことを前提としたうえで、以下、気になった点を挙げておきたい。

まず、中島は本書の冒頭で、かつて下中を「右翼」「エタイの知れぬ怪物」と評した大宅壮一を仮想敵としている。そのうえで、「右派／左派という枠組み」で下中を捉えないことが本書の意義だと述べている。しかし、少なくとも下中を「右翼」と述べた大宅が必ずしも的を外しているとは、評者には考えられなかった。近代日本において、「右翼」と呼ばれた人々が「超―国家主義」（極端な国家主義）から「超国家―主義」（国家を超克する主義）へと跳躍を果たそうとしたことは近年の思想史研究で共有されている知見ではなかろうか(五)。だから、仮に中島の議論に乗るのであれば、下中の「一貫

性」とは、むしろそうした意味での「右翼」でありつづけたことにあったのではないだろうか。したがって、「右派／左派という枠組み」で下中を捉えないという中島の理路を、評者は充分に共有することができなかった。中島が想定する「右派／左派という枠組み」がどのようなものであるのか、もう少し丁寧な説明が必要であったように思われる。

また、そもそも下中を「一貫性」においてのみ捉えることが妥当であるのか、という疑問も評者は抱いた。たしかに、平等主義的な思想の次元において、下中に「一貫性があった」と解釈することは不可能ではない。しかしこれは、まさに中島自身が批判的に対峙しようとした「性急さ」を抱え込んだ議論ではないだろうか。要するに、中島は「思想の一貫性」を強調するあまり、その実現手段の問題を等閑視してしまっているのではないか、ということである。仮に「人類の平等」を志向していたとしても、それを議会政治によって実現していくのか、戦争によって実現していくのか、あるいはメディアや教育かといった手段の違いによって、生まれてくる結果はまったく異なるものとなるはずである。

中島には、思想が手段に規定される可能性、つまりメディア論的に言えば、形式が内容を規定する可能性についての配慮が欠けていたように思われる。

また、思想レベルだけを見ても、本書を読んだかぎりでは、戦後の下中からは「天皇」の姿が消えていた。下中のなかで、天皇はその平等主義を担保する存在として大きな意義をもっていたはずなのに、彼はなぜそれを捨てたのだろう。そして彼は、象徴天皇制という、戦後日本の秩序のあり方をどのように考えていたのだろう。つまり、天皇に関しても下中は「一貫性」を保ちつづけていたと言えるのだろうか。中島はそういった問題については論じていない。

以上、述べてきたように、評者は本書をいくつかの疑問を抱えながら読まざるを得なかった。ただしそれは、本書の成果を前提としたうえでの話である。もちろんここまで述べてきた評者の見解は、評者自身にも返っ

てくる問題である。「個」の次元からいかに総合的な歴史像を描き出すかという、歴史研究者が直面せざるを得ない普遍的な課題について、本書は多くの示唆を与えている。

(一) たとえば、紅野謙介『物語岩波書店百年史一―「教養」の誕生』、佐藤卓己『物語岩波書店百年史二―「教育」の時代』、苅部直『物語岩波書店百年史三―「戦後」から離れて』(いずれも岩波書店、二〇一三年)がある。

(二) なお、引用に際して/を使っている箇所は、「右派/左派」の部分を除き評者の手によるものであり、改行を示している。以下同じ。

(三) 成田龍一「「評伝」の世界と「自伝」の領分―個人史研究をめぐる断片」『歴史評論』第七七七号、二〇一五年一月号、三九頁。

(四) 佐藤卓己「「メディア人間」の集合的無意想に挑む雑誌研究」および河野有理「コメント:「古典」か「雑誌」か」(いずれも『日本思想史学』第四九号、二〇一七年)を参照。

(五) 片山杜秀『近代日本の右翼思想』講談社、二〇〇七年。